





相良守次著

記憶とは何か

岩波新書

36

相良守次

明治36年生
東京大學文學部卒業，心理學
を專攻
東京大學文學部助教授
著書—「詩歌のリズム」「行動
と生活環境」「學び方の科學」

記憶とは何か

岩波新書（青版）36

昭和25年6月10日 第1刷發行

昭和29年8月25日 第8刷發行

¥ 100.



著 者 ^{さが}相 ^ら良 ^{もり}守 ^{つぐ}次

東京都千代田區神田一ツ橋2—3

發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布385

印刷者 山 田 一 雄

發行所 東京都千代田區 株式會社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

まえがき

社會にその歴史があるように、われわれ個人も銘々その歴史を擔い、その上に立って現在の生活を營んでいる。その歴史というのは、過去に何事がおこったかという記録ではなく、生きていて現實のなかに浸み透り、現實の生活を動かしているものである。このように過去を現在まで活かしておき、現實の生活のなかに參與させる働きは、主として記憶の作用によるのである。記憶は現實の經驗のなかに想い出として過去をくりひろげてみせるだけでなく、ときどきの營みを支障なくはこばせるための重要なささえをしている。

われわれは毎朝眼をさまして、まずみるものはいつもの部屋であり、きくのも耳なれた物音である。さて、と昨日までの生活の延長として今日の營みをはじめ。こうして事なく生活の繼續するのを記憶のお蔭として感謝する人はすくなくも知れない。しかし萬一昨日までの記憶を失ったら、未知の世界に放りだされて、今浦島になってしまふであらう。

ではいったい、記憶はどのようにして過去を保持しているのであろうか。過去の經驗が一

度姿を消してから、後に再びなんらかの姿で蘇ってくるまで、どこにどのようなように潜んでいるものか、われわれはその消息を知らない。それを直接に知る方法をわれわれはまだもたないのである。それで、學者たちは、ここにいろいろの假説を設けてこの姿のない記憶の存続を説こうとし、いろいろの記憶説が提出されたのである。

記憶の研究史を顧みれば、古く遠いところまで遡られる。科學的な研究法をとられたのは、周知のようにエビングハウス以來のことであるが、その後、に寄與された業績の數も夥しく、また理論の立て方にも變遷があった。しかし私は、本書のなかでは記憶研究史にはあまりふれないことにした。むしろ、このようなながい間の研究を背景にして達した現在の考え方を、いろいろな事實を語る間に理解して頂くことを主眼にして敘述してみた。したがって敘述の範圍も材料も、このような展望にしたがって限定されることになった。稿を起したのは眞夏の候であったが、途中で休み休みして、おえたのは年を忘れるという歳末になっていた。語りのこしたことも多いが、それは改めて別の機會にゆずることにしよう。

昭和二五年春

相良守次

目次

記憶というもの……………	一
想い出——保持——保持と忘却——既知體驗、再認感情——意識的記憶、機能的記憶……………	
保持されているもの……………	一五
記憶痕跡——表象記憶說——記憶痕跡の生理假說——理論概念としての痕跡……………	
記憶内容の連關性……………	二六
記憶内容の連關性とは——論理的記銘——圖式的記銘——機械的記銘——無意味材料の記銘の仕方—— ムネモニツクス 記憶術——記憶作用の發達……………	
記憶痕跡の變容……………	四三
記憶痕跡の變容とは——圖形痕跡の變容——ウルフの研究——變容する痕跡——	

知覺の形態化作用——形態化の法則と均衡化の原理——くりかえす再生の影響——

——再認法による痕跡の變容——名づけることの效果——バートレットの實驗——

記憶痕跡の體制化——リレー式の傳授

忘却のことども……………
九一

忘却の淵——エビングハウスの研究——忘却曲線について——一度おぼえた水泳

はなぜ忘れないか——最古の想い出——リミニセンス——忘却の原因——遡向抑

制——似たものの及ぼす遡向抑制——遡向抑制のおこるわけ——順向抑制——遡

向抑制と體制法則——再生抑制——遡向抑制を防ぐには——重疊效果——凝離效

果——酒、煙草などの抑制作用——感情の樂天性

心ぐみと記憶……………
二六

附隨的の記録——アールの實驗——ツァイガルニクの實驗——ハロワールの實驗——

——緊張を妊んだ痕跡——用事の仕忘れ——習慣的動作の仕忘れ

想起と回想	一四四
再生の機縁——回想の規準——想起の仕方——再生を妨げるもの	
再認作用	一五一
再認とは——再認の段階——既知體驗のおこるわけ——偽記憶	
むすび	一五八
體驗の記述——過程の説明	

記憶というもの

想い出

ぼうぼうと夏草はしげり、紺碧の空はどこまでも晴れわたっている。この海邊の草屋にうつり住んでから丁度滿四ヶ年になる。想いはおのずと終戦の日に馳せる。ここに轉住したのは終戦の翌日であつたのだ。あの日の印象はまだ腦裡になまなましい。この日を境としての前後のあれこれの想い出が、大海にうかぶ浮き嶋のようにうかんでくる。しかし不思議なのだ。あれからまだ四年しかたたないのだろうか。もう随分ながい歳月をへだてたような感じなのである。この感は昨年もあつた。一昨年は一層はげしかった。まだほんとうに二年しかならないのだろうかと疑がわしくてならなかった。

同じ時間をへだてても、その経過の状態の如何によって過去の印象は或いは遠く或いは近く記憶の世界に横たわっている。それはあたかも同じ距離をへだてたところにある物が、その間の空間の状態によって或いは遠く或いは間近にみえるのに似ている。いろいろの物を間に挿んでそのむこうにあるものは遠くみえる。想い出も有爲轉變を挿んでいけば、その時間

的展望は遠くなる。平時の數年にも相當する戰時、戰後の世相の變動をふくんだ歳々を送ったのであるから、回想の遙かになるのも當然のことといえよう。

おりにふれこうして現實の經驗にむすびついてひとりでうかんでくる再生を回想という。印象のふかい記憶は現實のなかにこれを喚びおこす機縁があつてその一端がうかんでくれば、積極的な努力なしにそれからそれへと回想の絲はたぐられ回想の國々にあそぶことになる。

しかしうすらいだ記憶はひとりではうかんでこない。積極的に想いだそうとする努力によつてはじめて再生される。このような有意的の再生を想起といっている。以前にはメモ用にだけ使用していた懷中日記に、戦争のところから簡単な日誌をかきつける習慣をつけた私は、近ごろときどき何かの都合で數日を空白にすることがあるが、そのまま空白にのこすのも氣が濟まないの、こういう場合には後からたまっている分を一緒に書きこむことにしている。しかし數日前の分になると、もうさっそくにはそれを續けて書きこむことはむずかしくなっている。そこで印象の新しい前日の分からはじめてだんだん遡ってゆく。そうしてなお想起のできないところができた場合には、その間に目ぼしい事柄はなかったかと考える。どこそこへ行ったのは何日だったろうか、あれは談話會のあつた翌日であつた、談話會は何曜であつたから、そうするとあそこへ出掛けたのは何曜になる、というふうに推してゆく。主だっ

た事項を中心にしてその前後の脈絡や附随しておきた事柄などの時間的配置などを推して、だんだんに空白をうずめてゆくのである。しかしそれでも数日前のことになると、その日の晩はどうして送ったかと考えても、いっこうに思い出せぬ場合が多い。想起された事柄とひっかかりのつかない平凡な営みなどは、手掛りがないので往生する。その日の天候はどうだったかな。これも何か天気と関係した事項がうかばないと判然としない。要するに断片的で目だたぬことは想起しにくいのである。しかし、いま想起できない事柄でも後になって、ひよいとおもいつかれることもある。記憶で保持されているものがいつでも自由に回想され或いは想起されるものとはいわれない。

保持

さて、記憶とは経験を保持し、これを再生する過程であるといわれている。記憶を保持と想起とにわけるとは既にプラトンからはじまっている。彼は経験の保持としての記憶をムネーメといい、想起としての記憶をアナムネシスとよんだ。そして、ムネーメは鳩舎に飼はれている鳩であるとすれば、アナムネシスは掌中に捕えられている鳩の如きものだと言っている。過去の経験が後に想起されるならば、それは記憶として保持されていたものにちがいない。けれどもただ保持されている状態の記憶はいわば潜勢的のものであって、現實に意識されているものではない。だからそれは鳩舎にしまっている鳩ではあっても、姿

はみえぬ鳩である。それが意識に再現されてはじめてわが掌中のものになるのである。

記憶の働きによってわれわれは過去の世界を保有することができるのであるが、更にそれを再生することによって過去をいまにおいて所有できるのである。意識に再現することによってわれわれは現在の地點に立つて過去を展望することができる。

保持と忘却

ところで、われわれが現に過去を所有するというのは想起においてだけであるか。記憶として保持されているものは、すべて想起されるものであるか。或いは、想起されるものだけが保持されているすべてであろうか。

われわれは誰でも、或るときに失念し、想いだせなかった事柄でも、他の場合にはおもいうかぶ事例にたびたび出遭ふ。たしかに知っているのだが、ちょっとおもいだせないという場合もしばしばある。どこかにしまい忘れた品物のように、おちついて探せばあらわれるのである。いつの日かおもいうかぶとすれば、もとよりそれは保持されている證據になる。

どうしてもおもいだせぬようになったものを普通忘れたという。だが、想起不可能であっても、まだそれを忘却と斷ずるのははやい。これではなかったかと原物をみせられ、或いは言ってきかされれば、そうだとか、違うとかの判別ができる場合もある。すなわち再認のできる場合で、これも記憶の保持を證するに足りるものである。

更に記憶がうすれ、想起はもとより、これかとみせられても再認もできないようになる。私は二十數年前高等學校では理科に籍をおいて、物理化學や數學なども正規の課程を一應修了したのであるが、いまはなんと努力しても微積分の面倒な式などは想起はおろか、みせられてもそれを學んだのかどうか全く再認もできなくなっている。こうなれば誰もそれは完全に忘れたのだというにちがいない。しかし同じことをもう一度おそわったらどうであろうか。はじめて學んだときよりもおそらく速かに學習できるとおもう。

このように同一の事項を再度ならうことを再學習というが、再學習が初回の學習よりも速かに完成するとすれば、これは初回の學習のなごりがなおのこっていて、その基礎のうえにつぎの學習が行われるからであらうと考えられる。過去の經驗はどういう姿かでお保持されているものがあつたからである。あたかも地上にあらわれる建物は崩壊してしまつても地下の土臺はのこっていて、そのうえに再建するやうなものである。

このようにみてくると、記憶はいろいろの姿で保持されていることが判る。いつ記憶のなごりが全く消失するかは容易に斷定できないことを知るのである。ただわれわれが、このやうに記憶が保持されていることを確實に知りうるのは、再生や再認、或いは再學習というやうな操作を通じてその事實を手にしえたときにかぎられるのである。再生も再認もできなく

なれば普通はそれを忘れたものとしているが、再學習法をとれば、なおなごりの存することが知られる。こうして、探求の途をひらいてゆけば、再學習法によっても捉えがたいところにも記憶のなごりのあることが確められてくるかもしれない。たとえば、類似の事柄に對する理解が容易になるとか、後の類似の心的活動に質的變化を及ぼすというかたちにおいて。これらは學習の一側面として知られている事實である。そして學習は先行の經驗に依存して生ずる心的過程である以上、そこには先行經驗のなごりの存在が當然推量される。しかしそれらのなごりが、どのような姿において保持され、どのような機制を以て後の經驗の變容に關與するかを觀察し事實を提出して明かにしなければ、未だ科學的事實として登録するわけにはゆかないわけである。

學窓を出れば數年ならずして日々の生活に關係のない學習内容は大方忘れてしまふ。だから骨を折っておぼえても、つまらぬはなしだというのは、多くの人々の詐らぬ感想であろう。ながい年月と多大の勞苦を費して學窓で學んだ内容が、後から後からと忘れられてゆくということは、たしかに無駄なはなしのようである。しかし具體的な内容としては再生や再認が不可能になつても、學習のなごりは後の心的活動に影響を與えるものとすれば、一見忘れるために習うような學習も效のない無駄骨折とばかりはいえないのである。

博覽強記といへば、ひろく學びよく記憶していることであるが、教養をたかめるといふことは決して博覽強記に盡きるのではない。學んだ個々の内容を材料にして一般的概念や知識の體系をつくり、こういう構造にして保持すれば、個々の内容はそのまま傳わらなくとも後の認識や判斷、理解の基礎として大いに役だつ。いわば個々の内容は消化されて一般的知識に化しているのである。こういう個々の内容の消化には、消化する働きとしての知性的作用が必要であるが、このような一般的知識をつくる材料としても、また一般的知識そのものの保持という點に關しても、記憶の意義を認めなくてはならない。

既知體驗

ときどきにうかぶわれわれの經驗世界をふりかえてみると、そこには、**現在の**

再認感情

環境から觸發され現在の事態にかかわる經驗もあれば、未來の事態にはせる期待

もあり、また未知の世界を描きだす想像や空想もあれば、過去の想い出も去來している。しかもこれらはいずれもそのときどきの現實の經驗にあらわれる意識の諸相であることには違いない。

これらの經驗のなかの或るものを想い出であり記憶であると感じるのは、どういう理由からであらうか。現實の事態をはなれた體驗にも未來にはせる想いもあれば過去をふりかえる想いもある。こうして**想像や空想**でうかべられた内容と、過去の想起した内容とはどこに區

別があるのか。

それは、それらの内容を意識にうかべるとき、心的作用の方に違いがあつて、それによつて兩者の差別がつくとも考えられる。或る事柄を想起しようとするときの心的作用と或る事柄を想像したり考えめぐらしたりするときの心的作用とは違ふということとは確かにいえる。それによつてそこに現象した内容は一方が想起内容となり他方は新しくあらわれた内容になるともいえる。しかし、同じように想起しようとつとめてうかんできた内容が凡て一様に想起内容としての性質を示すかといへば、そうもいえない。

よく知っている人の名前でも一寸想いうかばない場合は誰にもある。そんな場合にはこれではなかったかな、あれではなかったかな、とあれこれ思いつく名前をあげてみるのである。しかしどれも違う。そのうちに或る名前をいってみると、それだという體驗がでてくる。こういう場合に、前にいろいろと試みにあげた名前も知っているものを再生したものには違ひないが、それにはいま求めている名前があらわれたときに伴うような特殊の體驗はないのである。つまり、思ひつきでいってみる名前は特定の過去の印象とはむすびつかない一般的东西のものであつて、それを再生しても特別に記憶的想起内容だという指標がついていない。ところが、これだといふときの内容は特定の過去の印象とのむすびつきがある。たしかにそれが

過去の特定の印象と同一のものだといふ體驗がある。

このような過去經驗の再生であるといふ指標になる體驗的特徴を既知性質という。或いは熟知感情とよぶ學者もある。これはつまり、想起した内容に、これはかつて經驗したものと同一のものだ、とかこれは既知のものだという體驗が伴われるのであって、それは想起されたものが再認されているのである。だから、こういう指標を再認感情という人もある。こういう指標が伴われることが現實の經驗にかぶ諸々の意識内容が、過去經驗の想起されたものとその場で新たに出現したものととの區別をつける主要な標徴のひとつとみられるのである。

既知性質或いは再認感情にはいろいろ程度の差がある。それはあのとときあそこでみたものだというように、過去經驗の生じたときの日時や場所まで明瞭に伴われて再認されてくるともあれば、きわめてぼんやりと、この人はどこかで會ったことのある人だなあ、という工合に漠然とした既知性質として添ってくることもある。

このような性質が伴われることによってわれわれの經驗は體驗的に過去の生活に關聯を示してくるのであって、もしそれを全く缺いているような場合には、たとえ過去の經驗が再生してきている場合でも、その當人の體驗ではそれが記憶であるとはおもえなくなる。

これはアメリカの學者が試みた一人の健忘病の患者についての實驗であるが、その患者は